

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	中鉢 夏輝
論文題目	現代インドネシアにおけるイスラーム環境運動の展開		
(論文内容の要旨) 本論文は、現代インドネシアで活発に展開されるようになってきているイスラームの理念にもとづいた環境運動に注目し、その運動を支える独自の環境倫理がどのように形成されてきたかを論じるとともに、そうした環境倫理が実際の運動実践やその担い手にどのように実装・浸透しているのかを解明することを目的としたものである。 この目的に答えるために、本論文では次の3点を問いとして設定している。第1に、イスラーム環境運動において環境問題はどのような論理で語られており、その中でイスラームの理論的・社会的位置づけはどのようなものなのかという点、第2に、現代インドネシアにおけるイスラーム環境問題のアクターはどのような思想・現象の影響を受けているのかという点、第3に、イスラーム環境運動に関与している諸アクターは、どのような理念にもとづいて、イスラーム的倫理を環境保全の実践に適用しているのかという点である。 第1章では、イスラーム環境運動のグローバルな歴史的沿革を整理した上で、イスラーム環境倫理の理論的編成を自然の均衡を維持するためのムスリムの精神的義務であるハリーファ概念を中心に分析されている。 第2章では、環境問題が顕在化した1970年代以降のインドネシアにおいて、イスラーム環境運動が形成されてきた過程を概観しつつ、運動の背景にある多様な政治的・経済的・生態学的課題と、それに対するイスラーム団体とムスリム知識人による対応が論じられている。 第3章では、インドネシアのイスラーム法学における環境問題に対する解釈の形成・変容について分析されている。特に、新興のイスラーム法学者が台頭してきた1980年以降の動向について、イスラーム法学におけるマスラハ（公益）概念を軸に考察が行われている。 第4章では、インドネシアのイスラーム関係諸団体・機関が発行した法学裁定（ファトワー）を取り上げ、イスラーム法学者がどのような倫理的規範を環境問題に対して提起してきたのかについて、地域住民や生態系を重視した公益理解とインドネシア国民全体を想定した経済的公益理解をめぐるダイナミズムを軸に考察が行われている。 第5章では、ジョグジャカルタ特別州のある村のモスクで取り組まれているサダカ（自発的喜捨）にもとづいたごみ分別・リサイクル活動（通称：ごみサダカ）を事例として取り上げ、廃棄物管理におけるイスラーム環境運動の実態解明が行われている。			

第6章では、ジャワ島西部のボゴールの森林で取り組まれているイスラーム独自の寄進制度、ワクフを用いた森林保全活動を事例として取り上げ、森林保全におけるイスラーム環境運動の実態解明が行われている。

結論では、論文全体をまとめ、現代インドネシアにおけるイスラーム環境運動が、神との関係を軸とする宗教的義務に固定的に依存するものではなく、生態学的・社会的・経済的・精神的な側面から責任と利益を説明するイスラーム法を用い、公益を実現しようとする人々の意欲や想像力によって展開されていると総括されている。

(論文審査の結果の要旨)

インドネシアでは、スハルト体制期以降、環境破壊が深刻な社会問題として浮上してきている。その中で、イスラームの教えを正しく実践することで、環境問題の解決に寄与しようとする新たな取り組みが登場・展開されてきた。本論文は、イスラーム世界研究と持続型生存基盤論の一環として、インドネシアにおけるイスラーム環境運動を取り上げ、現地における長期のフィールドワークにもとづいて、イスラーム環境運動の実態とそれを支える独自の環境倫理の形成と展開、および両者の相互関係について考察を行ったものである。

本論文の学術的意義は以下の3点にまとめることができる。

第1は、現代イスラーム法研究への貢献である。イスラームと環境をめぐる従来のイスラーム法研究では、預言者ムハンマド時代から連綿と継承されてきたイスラーム法の理論体系から、現代の環境保全に関する法解釈がどのように導かれているのかを演繹的に検討するものが主流であった。これに対して、本論文では、法解釈における環境運動の実際の担い手の主体性にも焦点が当てられており、イスラーム法が提起する環境倫理を彼ら・彼女らがどのように解釈・理解し、自分たちの実践に応用しているのかという点にも考察が及んでいる。こうした考察は、従来のイスラーム法研究が十分に検討してこなかったムスリムの日常生活におけるイスラーム法のダイナミズムの一端を明らかにしたという点で学術的意義が大きい。

第2は、イスラーム社会経済研究への貢献である。従来のイスラーム社会経済研究では、ザカート、サダカ、ワクフといったイスラーム独自の伝統的社会経済制度について、相互扶助や慈善、社会福祉の文脈に範囲を絞ってそれらの機能や役割が考察されてきた。これに対して、本論文は、そうした伝統的社会経済制度が、環境保全という新しい分野とどのように結びつき、制度が活用・応用されているのかを豊富な事例（ごみサダカ、ワクフ林）とともに解明している。こうした考察は、伝統的社会経済制度の歴史的・現代的意義を新たな視点から評価する視座を開発したという点で学術的意義が大きい。

第3は、環境学および持続型生存基盤論に対するグローバルな貢献である。従来の環境学では、人間と自然の関係のあり方について、人間の主体性をより重視する考え方と、人間と自然の対等性を重視する考え方との間で活発な議論が交わされてきた。イスラームの環境倫理の独自性を探究する本論文では、イスラームにおけるハリーファ概念の分析にもとづいて、環境学における上記いずれの考え方とも異なる新しい人間と自然の関係のあり方が普遍的な形で提起されている。こうした考察は、深刻化する環境破壊に対峙する世界各地の取り組みや学術的探究に対しても、イスラーム環境運動の観点から新たな視座を提供するものであり、その点で本論文は、イスラーム世界研究の枠組み

を超えて、よりグローバルな学術的文脈の中で高く評価できるものである。

本論文は、以上のようにイスラーム世界研究に大きな貢献をなすのみならず、持続型生存基盤論、環境学にとっても貴重な貢献をなすものとする。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値のあるものと認める。また、2026年1月20日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。